

源氏物語

常夏

紫式部

青空文庫

露置きてくれなゐいとど深けれどおも

ひ悩めるなでしこの花

(晶子)

炎暑の日に源氏は東の釣つり殿どのへ出て涼んでいた。子息の中将が侍しているほかに、親しい殿上役人も数人席にいた。桂川かつらの鮎あゆ、加茂かも川の石いし臥ふしなどというような魚を見る前で調理させて賞味するのであったが、例のようにまた内大臣の子息たちが中将たすを訪ねて来た。

「寂しく退屈な気がして眠かった時によくおいでになった」

と源氏は言つて酒を勧めた。氷の水、水すい飯はんなどを若い人は皆

大騒ぎして食べた。風はよく吹き通すのであるが、晴れた空が西日になるころには蝉せみの声などからも苦しい熱が撒まかれる気がするほど暑気が堪えがたくなつた。

「水の上の価値が少しもわからない暑さだ。私はこんなふうにして失礼する」

源氏はこう言つて身体からだを横たえた。

「こんなころは音楽を聞こうという気にもならないし、さてまた退屈だし、困りますね。お勤めに出る人たちはたまらないでしょうね。帯も紐ひもも解かれないのだからね。私の所だけでも几帳きちょう面にめんせずにに気楽なふうになつて、世間話でもしたらどうですか。何か珍しいことで睡気ねむけのさめるような話はありませんか。なんだ

かもう老^{としより}人になってしまった気がして世間のこともまったく知らずにいますよ」

などと源氏は言うが、新しい事実として話し出すような問題もなくて、皆かしこまったふうで、涼しい高欄に背を押しつけたまま黙っていた。

「どうしてだれが私に言ったことかも覚えていないのだが、あなたのほうの大臣がこのごろほかでお生まれになったお嬢さんを引き取って大事がっついておいでになるといふことを聞きましたがおほんとうですか」

と源氏は弁^{べん}の少将に問うた。

「そんなふうには世間でたいそうに申されるようなことでもござい

ません。この春大臣が夢占いをさせましたことが噂うわさになりました、それからひよつくりと自分は縁故のある者だと名のつて出て来ましたのを、兄の中将が真偽の調査にあたりまして、それから引き取つて来たようですが、私は細かいことをよく存じません。結局珍談の材料を世間へ呈供いたしましたことになったのでございませぬ。大臣の尊厳がどれだけそれでそこなわれしましたかしれません」少将の答えがこうであつたから、ほんとうのことだつたと源氏は思った。

「たくさんな雁かりの列から離れた一羽までもしいてお捜しになつたのが少し欲深かつたのですね。私の所などこそ、子供が少ないのだから、そんな女の子なども見つけたいのだが、私の所では気が

進まないのか少しも名のつて来てくれる者が無い。しかしともかく迷惑なことだつても大臣のお嬢さんには違ひないのでしよう。若い時分は無節制に恋愛関係をお作りになつたものだからね。底のきれいでない水に映る月は曇らないであろうわけはないのだからね」

と源氏は微笑しながら言つていた。子息の左中將も真相をくわしく聞いていることであつたからこれも笑いを洩もらさないではいられなかつた。弁の少將と藤とうのじじゆう侍従はつらそうであつた。

「ねえ朝臣あそん、おまえはその落ち葉でも拾つたらいいだろう。不名誉な失恋男になるよりは同じ姉きょうだい妹まいなのだからそれで満足をすればいいのだよ」

子息をからかうような調子で父の源氏は言うのであつた。内大臣と源氏は大体は仲のよい親友なのであるが、ずっと以前から性格の相違が原因になつたわづかな感情の隔たりはあつたし、このごろはまた中将を侮蔑ぶべつして失恋の苦しみをさせている大臣の態度に飽き足らないものがあつて、源氏は大臣が癩しやくにさわる放言をすると間接に聞くように言つていたのである。新しい娘を迎えて失望している大臣の噂うわさを聞いても、源氏は玉鬘たまかざらのことを聞いた時に、その人はきつと大騒ぎをして大事に扱ふことであろう、自尊心の強い、対象にする物の善よさ悪さで態度を鮮明にしないではいられない性質の大臣は、近ごろ引き取つた娘に失望を感じている様子は想像ができるし、また突然にこの玉鬘を見せた時の歓よろこび

ぶりも思われなくてもない、極度の珍重ぶりを見せることであるなど源氏は思っていた。夕べに移るころの風が涼しくて、若い公子たちは皆ここを立ち去りがたく思うふうである。

「気楽に涼んで行ったらいいでしょう。私もとうとう青年たちからけむたがられる年になった」

こう言つて、源氏は近い西の対を訪ねようとしていたから、公子たちは皆見送りをするためについて行つた。日の暮れ時のほの暗い光線の中では、同じような直衣姿のうしのだれがだれであるかもよくわからないのであつたが、源氏は玉鬢に、

「少し外をよく見える所まで来てごらんなさい」

と言つて、従えて来た青年たちのいる方をのぞかせた。

「少将や侍従をつれて来ましたよ。ここへは走り寄りたいほどの好奇心を持つ青年たちなのだが、中將がきまじめ過ぎてつれて来ないのですよ。同情のないことですよ。この青年たちはあなたに對して無關心な者が一人もないでしょう。つまらない家の者でも娘でいる間は若い男にとって好奇心の対象になるものだからね。私の家というものを實質以上にだれも買いかぶっているのですからね、しかも若い連中は六条院の夫人たちを恋の対象にして空想に陶醉するようなことはできないことだったのが、あなたという人ができたから皆の注意はあなたに集まることになったのです。そうした求婚者の真実の深さ浅さというようなものを、第三者になつて觀察するのはおもしろいことだろうと、退屈なあまりに以

前からそんなことがあればいいと思つていたのがようやく時期が来たわけです」

などと源氏はささやいていた。この前の庭には各種類の草花を混ぜて植えるようなことはせずに、美しい色をした撫子なでしこばかりを、唐撫子からなでしこ、大和撫子やまともことに優秀なのを選んで、低く作った垣かきに添えて植えてあるのが夕映ゆうばえに光つて見えた。公子たちはその前を歩いて、じつと心が惹ひかれるようにたたずんだりもしていた。

「りっぱな青年官吏ばかりですよ。様子にもとりなしにも欠点は少ない。今日は見えないが右中將は年かさだけあつてまた優雅さが格別ですよ。どうです、あれからのちも手紙を送つてよこしま

すか。軽蔑けいべつするような態度はとらないようにしなければいけない」

などとも源氏は言った。すぐれたこの公子たちの中でも源中将は目だって艶えんな姿に見えた。

「中将をきらうことは内大臣として意を得ないことですよ。御自分が尊貴であればあの子も同じ兄きょうだい妹から生まれた尊貴な血筋というものなのだからね。しかしあまり系統がきちんとしていておおぎみみふうふう王風おうふうの点が気に入らないのですかね」

と源氏が言った。

「来まさば（おほきみ来ませ婿にせん）というような人もあすこにはあるのではございませんか」

「いや、何も婿に取られたいのではありませんがね。若い二人が作った夢をこわしたままにして幾年も置いておかれるのは残酷だと思ふのです。まだ官位が低くて世間体がよろしくないと思われ

るのだったら、公然のことにはしないで私へお嬢さんを託しておかれるという形式だつていいじゃないのですか。私が責任を持たばいいはずだと思ふのだが」

源氏は歎息たんそくした。自分の実父との間にはこうした感情の疎隔があるのかと玉鬘たまかざらははじめて知つた。これが支障になつて親に逢あいうる日がまだはるかなことに思わねばならないのであるかと悲しくも思い、苦しくも思つた。月がないころであつたから燈籠とうろうに灯ひがともされた。

「灯が近すぎて暑苦しい、これよりはかがり箏がよい」

と言つて、

「箏を一つこの庭で焚たくように」

と源氏は命じた。よい和琴わごんがそこに出ているのを見つけて、引き寄せて、鳴らしてみると律の調子に合わせてあつた。よい音もする琴であつたから少し源氏は弾ひいて、

「こんなほうのことには趣味を持っていられないのかと、失礼な推測をしてましたよ。秋の涼しい月夜などに、虫の声に合わせるほどの気持ちでこれの弾かれるのははなやかでいいものです。これはもったいらしく弾く性質の楽器ではないのですが、不思議な楽器で、すべての楽器の基調になる音を持っている物はこれなの

ですよ。簡単にやまと琴という名をつけられながら無限の深味のあるものなのです。ほかの楽器の扱いにくい女の人のために作られた物の気がします。おやりになるのならほかの物に合わせて熱心に練習なさい。むずかしいことがないような物で、さてこれに妙技を現わすということはむずかしいといったような楽器です。現在では内大臣が第一の名手です。ただ清搔すががきをされるのにもあらゆる楽器の音を含んだ声が立ちますよ」

と源氏は言った。玉鬘もそのことはかねてから聞いて知っていた。どうかして父の大臣の爪つま音おとに接したいとは以前から願っていたことで、あこがれていた心が今また大きな衝動を受けたのである。

「こちらにありまして、音楽のお遊びがございます時などに聞くことができませんでしょうか。田舎いなかの人などもこれはよく習っておりますから、気楽に稽古けいこができますもののように私は思っていたのでございますがほんとうの上手じょうずな人の弾くのは違っているのでございましょうね」

玉鬘は熱心なふうに尋ねた。

「そうですね。あずま琴などとも言つてね、その名前だけでも軽けいいべついべつ蔑べつしてつけられている琴のようですが、宮中の御遊ぎょゆうの時に図書としよの役人に楽器の搬入を命ぜられるのにも、ほかの国は知りませんがここではまず大和琴やまとが真先まっさきに言われます。つまりあらゆる楽器の親にこれがされているわけです。弾ひくことは練習次第で上

達しますが、お父さんに同じ音楽的の遺伝のある娘がお習いすることは理想的ですね。私の家などへも何かの場合においてにならないことはありませんが、精いっぱいには弾かれるのを聞くことなどは困難でしょう。名人の芸というものはなかなか容易に全部を見せようとしらないものですからね。しかしあなたはいつか聞けますよ」

こう言いながら源氏は少し弾いた。はなやかな音であつた。これ以上の音が父には出るのであろうかと玉たま鬢かざらは不思議な気もしながらますます父にあこがれた。ただ一つの和琴わごんの音だけでも、いつの日に自分は娘のために打ち解けて弾いてくれる父親の爪音にあうことができるのであろうと玉鬢はみずからをあわれんだ。

「貫ぬき川の瀬せ々のやはらだ」（やはらたまくらやはらかに寝る夜はなくて親さくる妻）となつかしい声で源氏は歌っていたが「親さくる妻」は少し笑いながら歌い終わったあとの清搔すがきが非常におもしろく聞かれた。

「さあ弾いてごらんなさい。芸事は人に恥じていては進歩しないものですよ。『想夫恋そうふれん』だけはきまりが悪いかもしれませんがね。とにかくだれとでもつとめて合わせるのがいいのですよ」

源氏は玉鬘の弾くことを熱心に勧めるのであったが、九州の田舎で、京の人であることを標ひょうぼう榜ぼうしていた王族の端くれのような人から教えられただけの稽古けいこであつたから、まちがつてはと気恥かずかしく思つて玉鬘は手を出そうとしないのであつた。源

氏が弾くのを少し長く聞いていれば得る所があるであろう、少しでも多く弾いてほしいと思う玉鬘であつた。いつとなく源氏のほうへ膝いざ行り寄つていた。

「不思議な風が出てきて琴の音響ひびきを引き立てている気がします。どうしたのでしょうか」

と首を傾けている玉鬘の様子が灯ひの明りに美しく見えた。源氏は笑いながら、

「熱心に聞いていてくれない人には、外から身にしむ風も吹いてくるでしょう」

と言つて、源氏は和琴を押しやつてしまった。玉鬘は失望に似たようなものを覚えた。女房たちが近い所に来ているので、例の

ような戯談じょうだんも源氏は言えなかつた。

「撫子なでしこを十分に見ないで青年たちは行つてしまいましたね。どうかして大臣にもこの花壇をお見せしたいものですよ。無常の世なのだから、すべきことはすみやかにしなければいけない。昔大臣が話のついでにあなたの話をされたのも今のこのことのような気がします」

源氏はその時の大臣の言葉を思い出して語つた。玉鬘は悲しい気持ちになつていた。

「なでしこの常とこなつかしき色を見ばもとの垣根かきねを人や尋ねん

私にはあなたのお母さんのことで、やましい点があつて、それでつい報告してあげることが遅れてしまうのです」

と源氏は言った。玉鬘は泣いて、

山がつの垣かきほに生おひし撫なでしこ子このもとの根ねざしをたれか尋ねん

とはかないふうに言つてしまう様子が若々しくなつかしいものに思われた。源氏の心はますますこの人へ惹ひかれるばかりであつた。苦しいほどにも恋しくなつた。源氏はとうていこの恋心は抑制してしまふことのできるものでないと知つた。

玉たま鬘かづらの西の対への訪問があまりに続いて人目を引きそうに

思われる時は、源氏も心の鬼にとがめられて間は置くが、そんな時には何かと用事らしいことをこしらえて手紙が送られるのである。この人のことだけが毎日の心にかかっている源氏であった。

なぜよけいなことをし始めて物思いを自分はするのであろう、煩はんもん

悶もんなどはせずに感情のままに行動することにすれば、世間の批

難は免れないであろうが、それも自分はよいとして女のために気の毒である。どんなに深く愛しても春の女によおう王と同じだけにその

人を思うことの不可能であることは、自分ながらも明らかに知っている。第二の妻であることによつて幸福があろうとは思われない。自分だけはこの世のすぐれた存在であつても、自分の幾人もの妻の中の一人である女に名誉のあるわけではない。平凡な納言級

の人の唯一の妻になるよりも決して女のために幸福でないと源氏は知つていたのであつたから、しいて情人にするのが哀れで、兵ひようぶきよきうやう

部 卿の宮か右大将に結婚を許そうか、そうして良人おつとの家へ行つてしまえばこの悩ましきから自分は救われるかもしれない。消極的な考えではあるがその方法を取ろうかと思う時もあった。しかもまた西の対へ行つて美しい玉鬘を見たり、このごろは琴を教えてもいたので、以前よりも近々と寄つたりしては決心していたことが揺ゆいらでしまふのであつた。玉鬘もこうしたふうに源氏が扱あいふはじめたころは、恐ろしい気もし、反感を持ったが、それ以上のことはなくて、やはり信賴のできそうなのに安心して、しいて源氏の愛撫あいぶからのがれようとはしなかつた。返辞などもなれなれし

くならぬ程度にする 愛あいきょう 嬌きょう の多さは知らず知らずに十分の魅力になつて、前の考えなどは合理的なものでないと源氏をして思わせた。それでは今のままに自分の手もとへ置いて結婚をさせることにしよう、そして自分の恋人にもしておこう、処女である点が自分に 躊躇ちゆうちよ をさせるのであるが、結婚をしたのちもこの人に深い愛をもつて臨めば、良人おつとのあることなどは問題でなく恋は成り立つに違いないとこんなけしからぬことも源氏は思った。それを実行した暁にはいよいよ深い煩悶はんもんに源氏は陥ることであろうし、熱烈でない愛しようはできない性質でもあるから悲劇がそこに起こりそうな氣のすることである。

内大臣が娘だと名のつて出た女を、直ちに自邸へ引き取つた処

置について、家族も家司けいしたちもそれを軽率だと言っていること、世間でも誤ったしかただと言っていることも皆大臣の耳にははいつていたが、弁べんの少将が話のついでに源氏からそんなことがあるかと聞かれたことを言い出した時に大臣は笑って言った。

「そうだ、あすこにも今まで噂うわさも聞いたことのない外腹の令嬢ができて、それをたいそうに扱っていられるではないか。あまりに他人のことを言われぬ大臣だが、不思議に私の家のことだと口の悪い批評をされる。このことなどはそれを証明するものだよ」

「あちらの西の対の姫君はあまり欠点もない人らしゅうございませす。兵部卿ひょうぶきょうの宮などは熱心に結婚したがっていらつしやるのですから、平凡な令嬢でないことが想像されると世間でも言つて

おります」

「さあそれがね、源氏の大臣の令嬢である点でだけありがたく思われるのだよ。世間の人心というものは皆それなのだ。必ずしも優秀な姫君ではなからう。相当な母親から生まれた人であれば以前から人が聞いているはずだよ。円満な幸福を持っていられる方だが、りっぱな夫人から生まれた令嬢が一人もないのを思うと、だいたい子供が少ないたちなんだね。劣り腹あかしといって明石の女の生んだ人は、不思議な因縁で生まれたということだけでも何となく未来の好運が想像されるがね。新しい令嬢はどうかすれば、それは実子でないかもしれぬ。そんな常識で考えられないようなこともあの人はされるのだよ」

と内大臣は 玉たまかずら鬢かみをけなした。

「それにしても、だれが婿に決まるのだろうか。兵部卿の宮の御熱心が結局勝利を占められることになるのだろうか。もともと特別にお仲がいいのだし、大臣の趣味とよく一致した風流人だからね」

と言ったあとに大臣は雲井くもいの雁かりのことを残念に思った。そうしたふうになれと結婚をするかと世間に興味を持たせる娘に仕立てそこねたのがくやしいのである。これによつても中將が今一段光彩のある官に上らない間は結婚が許されないと大臣は思った。源氏がその問題の中へはいつて来て懇請することがあれば、やむをえず負けた形式で同意をしようという大臣の腹であったが、中將のほうでは少しも焦しょうりよ慮りよするふうを見せず落ち着いているので

あつたからしかたがないのである。こんなことをいろいろと考え
ていた大臣は突然行つて見たい気になつて雲井の雁の居間を訪ね
た。少将も供をして行つた。雲井の雁はちようど昼寝をしていた。
薄物の単衣ひとえを着て横たわつてゐる姿からは暑い感じを受けなかつ
た。可憐かれんな小柄な姫君である。薄物に透いて見える肌はだの色がきれ
いであつた。美しい手つきをして扇を持ちながらその肱ひじを枕まくらにし
ていた。横にたまつた髪はそれほど長くも、多くもないが、端の
ほうが感じよく美しく見えた。女房たちも几帳きちようの蔭かげなどにはい
つて昼寝をしている時であつたから、大臣の来たことをまだ姫君
は知らない。扇を父が鳴らす音に何げなく上を見上げた顔つきが
可憐ほおで、頬ほおの赤くなつてゐるのなども親の目には非常に美しいも

のに見られた。

「うたた寝はいけないことなのに、なぜこんなふうな寝方をしてましたか。女房なども近くに付いていないでけしからんことだ。女というものは始終自身を護るまも心がなければいけない。自分自身を打ちやりしているようなふうの見えることは品の悪いものだ。賢そうに不動の陀羅尼だらにを読んで印を組んでいるようなのも憎らしいがね。それは極端な例だが、普通の人でも少しも人と接触をせずに奥に引き入ってばかりいるようなことも、気けだか高いようでもあまり感じのいいものではない。太政大臣が未来のお后きさぎきの姫君を教育してられる方針は、いろんなことに通じさせて、しかも目だつほど専門的に一つのことを深くやらせまい、そしてまたわか

らないことは何も無いようにということであるらしい。それはもつともなことだが、人間にはそれぞれの天分があるし、特に好きなこともあるのだから、何かの特色が自然出てくることだろうと思われる。大人おとなになつて宮廷へはいられるころはたいしたものだろうと予想される」

などと大臣は娘に言っていたが、

「あなたをこうしてあげたいといろいろ思っていたことは空想になつてしまつたが、私はそれでもあなたを世間から笑われる人にはしたくないと、よその人のいろいろの話を聞くごとにあなたのことを思つて煩悶はんもんする。ためそうとするだけで、表面的な好意を寄せるような男に動揺させられるようなことがあつてはいけま

せんよ。私は一つの考えがあるのだから」

ともかわいく思いながら訓いましめもした。昔は何も深く考えることができずに、あの騒さわぎのあつた時も恥知らずに平気で父に対していたと思ひ出すだけでも胸がふさがるように雲井の雁は思った。大宮の所からは始終逢あいたいというふうにお手紙が来るのであるが、大臣が気にかけていることを思うと、御訪問も容易にできないのである。

大臣は北の対に住ませである令嬢をどうすればよいか、よけいなことをして引き取ったあとで、また人が譏そしるからといって家へ送り帰すのも軽率な気のことであるが、娘らしくさせておいては満足しているらしく自分の心持ちが誤解されることになって

いやである、女御によごの所へ来させることにして、馬鹿娘ばかとして人中に置くことにさせよう、悪い容貌ようぼうだというがそう見苦しい顔でもないのであるからと思つて、大臣は女御に、

「あの娘をあなたの所へよこすことにしよう。悪いことは年のいった女房などに遠慮なく矯きようせい正させて使つてください。若い女房などが何を言つてもあなただけではいっしょになつて笑うようなことをしないでお置きなさい。軽けい佻ちやうに見えることだから」

と笑いながら言つた。

「だれがどう言いましたも、そんなつまらない人ではきつとないと思います。中将の兄様などの非常な期待に添わなかつたというだけでしよう。こちらへ来ましてからいろんな取り沙汰などをさ

れて、一つはそれでのぼせて粗相そそうなこともするのでございませう」

と女御は貴女きじよらしい品のある様子で言っていた。この人は一つ一つ取り立てて美しいということのできない顔で、そして品よく澄み切った美の備わった、美しい梅の半ば開いた花を朝の光に見るような奥ゆかしさを見せて微笑しているのを大臣は満足して見た。だれよりもすぐれた娘であると意識したのである。

「しかしなんといつても中将の無経験がさせた失敗だ」

などとも父に言われている新令嬢は気の毒である。大臣は女房を訪ねたたず歸りにその人の所へも行って見た。

座敷の御簾みすをいっぱい張り出すようにして裾すそをおさえた中で、

五節ごせちという生意気な若い女房と令嬢は双六すごろくを打っていた。

「しようさい、しようさい」

と両手をすりすり賽さいを撒まく時の呪文じゆもんを早口に唱えているのに悪感おかんを覚えながらも大臣は従つて来た人たちの人払いの声を手で制して、なおも妻戸の細目に開いた隙すきから、障子の向こうを大臣はのぞいていた。五節も蓮葉はすつばらしく騒いでいた。

「御返報しますよ。御返報しますよ」

賽の筒を手でひねりながらすぐには撒こうとしない。姫君の容貌は、ちよつと人好きのする愛嬌あいきようのある顔で、髪もきれいであるが、額の狭いのと頓とんきよう狂きやうな声とにそこなわれている女である。美人ではないがこの娘の顔に、鏡で知っている自身の顔と共

通したもののあるのを見て、大臣は運にのろわれている気がした。「こちらで暮らすようになって、あなたに何か気に入らないことがありませんか。つい忙しくて訪ねたずに来ることも十分できないが」

と大臣が言うと、例の調子で新令嬢は言う。

「こうしていられますことに何の不足があるものでございますか。長い間お目にかかりたいと念がけておりましたお顔を、始終拝見できませんことだけは成功したものは思われませんが」

「そうだ、私もそばで手足の代わりに使う者もあまりないのだから、あなたが来たらそんな用でもしてもらおうかと思っていたが、やはりそうはいかないものだからね。ただの女房たちというものは、多少の身分の高下はあっても、皆いっしょに用事をしていて

は目だたずに済んで気安いもののだが、それでもだれの娘、だれの子ということが知られているほどの身の上の者は、親兄弟の名誉を傷つけるようなことも自然起こってきてもおもしろくないものだろうが、まして」

言いさして話をやめた父の自尊心などに令嬢は頓とんじやく着やくしていなかつた。

「いいえ、かまいませんとも、令嬢などと思おほしめ召めさないで、女房たちの一人としてお使いくださいまし。お便器のほうのお仕事だつて私はさせていただきます」

「それはあまりに不似合いな役でしょう。たまたま巡り合つた親に孝行をしてくれる心があれば、その物言いを少し静かにして聞

かせてください。それができれば私の命も延びるだろう」

道化たことを言うのも好きな大臣は笑いながら言っていた。

「私の舌の性質がそうなんです。小さい時にも母が心配しましてよく訓戒されました。妙法寺の別当の坊様が私の生まれる時産ぶや屋んそくにいたのですってね。その方にあやかっただと言つて母が歎息んそくしておりました。どうかして直したいと思つております」

むきになつてこう言うのを聞いても孝心はある娘であると大臣は思つた。

「産屋うぶやなどへそんなお坊さんの来られたのが災難なんだね。そのお坊さんの持つている罪の報いに違いないよ。唾おしと吃どもりは仏教そしを譏そしつた者の報いに数えられてあるからね」

と大臣は言っていたが、子ながらも畏敬いけいの心の湧わく女御にょごの所へこの娘をやることは恥はずかしい、どうしてこんな欠陥の多い者を家へ引き取ったのであろう、人中へ出せばいよいよ悪評がそれからそれへ伝えられる結果を生むではないかと思つて、大臣は計画を捨てる氣にもなつたのであるが、また、

「女御が家うちへ歸つておいでになる間に、あなたは時々あちらへ行つて、いろんなことを見習まなうがいいと思う。平凡な人間も貴女きじよがたの作法えとくに会得えとくが行くと違つてくるものだからね。そんなつもりであちらへ行こうと思ひますか」

とも言つた。

「まあうれしい。私はどうかして皆さんから兄弟だと認めていた

だきたいと寝ても醒めても祈っているのでございますからね。そのほかのことはどうでもいいと思つていたくらいでございますからね。お許しさえございましたら女御さんのために私は水を汲んだり運んだりしましてもお仕えいたします」

なお早口にしゃべり続けるのを聞いていて大臣はますます憂鬱な気分になるのを、紛らすために言った。

「そんな労働などはしなくてもいいがお行きなさい。あやかつたお坊さんはなるべく遠方のほうへやつておいてね」

滑稽扱いにして言つているとも令嬢は知らない。また同じ大臣といつても、きれいで、物々しい風采を備えた、りつぱな中のりつぱな大臣で、だれも気おくれを感じるほどの父であること

も令嬢は知らない。

「それではいつ女御さんの所へ参りましょう」

「そう、吉日でなければならぬかね。なにいいよ、そんなたいそうなふうには考えずに、行こうと思えば今日にでも」

言い捨てて大臣は出て行つた。四位五位の官人が多くあとに従つた、権勢の強さの思われる父君を見送つていた令嬢は言う。

「ごりつぱなお父様なこと、あんな方の種なんだのに、ずいぶん小さい家で育つたものだ私は」

ごせち
五節は横から、

「でもあまりおいばりになりすぎますわ、もつと御自分はよくなくて、ほんとうに愛してくださるようなお父様に引き取られて

いらつしやればよかつた」

と言つた。真理がありそうである。

「まああんた、ぶちこわしを言うのね。失礼だわ。私と自分とを同じように言うようなことはよしてくださいよ。私はあなたなどとは違つた者なのだから」

腹をたてて言う令嬢の顔つきに 愛あいき嬌ようがあつて、ふぎけたふ

うな姿が可憐かれんでないこともなかつた。ただきわめて下層の家で育てられた人であつたから、ものの言いようを知らないのである。

何でもない言葉もゆるく落ち着いて言えば聞き手はよいことのように聞くであろうし、巧妙でない歌を話に入れて言う時も、声こわづかいをよくして、初め終わりをよく聞けないほどにして言えば、

作の善悪を批判する余裕のないその場ではおもしろいことのようにも受け取られるのである。こわごわ強々しく非音楽的な言いようをするれば善いことも悪く思われる。めのとふところ乳母の懐育ちのまま、何の教養も加えられてない新令嬢の真価は外観から誤られもするのである。そう頭が悪いのでもなかつた。三十一字の初めと終わりの一貫してないような歌を早く作つて見せるくらいの才もあるのである。

「女御さんの所へ行けとお言いになつたのだから、私がしぶしぶにして気が進まないふうに見えては感情をお害しになるだろう。私は今夜のうちに出かけることにする。大臣がいらつしやつても女御さんなどから冷淡にされてはこの家で立つて行きようがないじゃないか」

と令嬢は言っていた。自信のなさが気の毒である。手紙を先に書いた。

葦垣あしがきのまぢかきほどに侍らはべひながら、今まで影踏むばかりのしるしも侍らぬは、なこそその関をや据すゑさせ給ひつらんとなん。知らねども武蔵野むさしのといへばかしこけれど、あなかしこやかしこや。

点の多い書き方で、裏にはまた、まことや、暮れにも参りこむと思ひ給へ立つは、厭いとふにはゆるにや侍らん。いでや、いでや、怪しきはみなせ川にを。と書かれ、端のほうに歌もあつた。

草若みひたちの海のいかが崎さきいかで相見む田子の浦波

大川水の（みよし野の大川水のゆほびかに思ふものゆゑ浪なみの立
つらん）

青い色紙一重ねに漢字がちに書かれてあつた。肩がいかつて、しかも漂つて見えるほど力のない字、しとという字を長く氣どつて書いてある。一行一行が曲がつて倒れそうな自身の字を、満足そうに令嬢は微笑して読み返したあとで、さすがに細く小さく巻いて撫なで子の花なでしこへつけたのであつた。廁かわ係やりの童女はきれいな子で、奉公なれた新参者であるが、それが使いになつて、女御の台だい盤ばん所どころへそつと行つて、

「これを差し上げてください」

と言つて出した。下^{しもづか}仕えの女が顔を知つていて、北の対に使われてゐる女の子だといつて、撫子を受け取つた。大輔^{たゆう}という女房が女御の所へ持つて出て、手紙をあけて見せた。女御は微笑をしながら下へ置いた手紙を、中納言という女房がそばにいて少し読んだ。

「何でございますか、新しい書き方のお手紙のようでございますね」

となお見たそうに言うのを聞いて、女御は、

「漢字は見つけないせいかしら、前後が一貫してないように私などには思われる手紙よ」

と言いながら渡した。

「返事もそんなふうにたいそうに書かないでは低級だと言って軽いべつ蔑いべつされるだろうね。それを読んだついでにあなたから書いておやりよ」

と女御は言うのであつた。露骨に笑い声はたてないが若い女房は皆笑っていた。使いが返事を請求していると言つてきた。

「風流なお言葉ばかりでできているお手紙ですから、お返事はむずかしゆうございます。仰せはこうこうと書いて差し上げるのも失礼ですし」

と言つて、中納言は女御の手紙のようにして書いた。

近きしるしなきおぼつかなさには恨めしく、

ひたちなる駿河するがの海の須磨すまの浦なみに浪立ちいでよ箱崎はこざきの松

中納言が読むのを聞いて女御は、

「そんなこと、私が言ったように人が皆思うだろうから」

と言つて困つたような顔をしていると、

「大丈夫でございますよ。聞いた人が判断いたしますよ」

と中納言は言つて、そのまま包んで出した。新令嬢はそれを見て、

「うまいお歌なこと、まつとお言いになつたのだから」

と言つて、甘いにおいの薫香くんこうを熱心に着物へ焚たき込んでいた。

紅べにを赤々とつけて、髪をきれいになでつけた姿にはにぎやかな愛あ
嬌いきようがあつた、女御との会談にどんな失態をすることか。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

常夏

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>